

## 「愛と付度」

### ルカによる福音書 6 章 31～32 節

聖学院大学名誉学長、聖学院大学名誉教授 清水 正之

人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい。自分を愛してくれる人を愛したところで、あなたにどんな恵みがあるか。罪人でも、愛してくれる人を愛している。(ルカによる福音書 6 章 31-32 節)

それぞれの境遇によって違いはあるかと思いますが、3 年を超える新型コロナ禍のもことで、友人知人と気楽に会って食事をするという機会が減ったという人は多いでしょう。今後感染が収まっても、人との関わりの形が、旧に復することはないのでは、という見方もあります。こんな中で私たちは、学院の 120 周年を祝うこととなります。

聖学院の淵源を辿るなら、1883 年にキリスト教プロテスタントの信仰の伝道をめざして、アメリカのデイスイプルス派の教会から来日し、翌年より秋田で伝道を行った、4 人の宣教師(二組の宣教師夫妻)の活動に端を発します。それから 10 年後の 1893 年の秋、ハーヴェイ・H・ガイ博士が来日しました。その後、数多くの宣教師や日本の人たちの努力と熱意によって聖学院は発展を続け、蒔かれた種が枝を伸ばし大木となり、一人ひとりの心を大切にし、人間としての成長を促すという教育姿勢は、現在の聖学院に受け継がれています。

感染状況の変化、あるいはある意味での慣れは、そうした私たちの日常に少し変化を与えてもいます。私事ですが、今年、暫く中断していたある気の置けない知人たちのグループの会食を再開しました。会場は、平日夕方のデパートのレストラン街、どの店も二分の一か、三分の一の人の入り。かつては席待ちの列がふつうの風景でした。お客は、仕事のつきあいというより、家族のような親密な関係が多いと見受けました。

オンラインでのやりとりが、人間の関係のうちにたしかに浸潤し大事な要素となっていることは確かにあります。しかし対面的な人との関わりの世界は必ず戻ってきます。

人との交わりの世界、とくに対面的な関わりの世界は、愛情や友情といった心地よさのみで満ちた安楽なものではありません。人はそれぞれの思い、願い、希望を持っています。思い通りに進んでいきたいと願いつつ、他者はしばしば私の前に立ち塞がり、ときに障害となり、敵対し、あるいは深く心を傷つけられることさえあります。生きることは、他者という存在とどう交わり関わっていくか、とほぼ同義ともいえます。

聖書では繰り返し、愛が説かれます。愛は徹底的に他者を慮ることを教えています。日々の実感からは、まるで寝言をいっているかのように聞こえかねません。

ただここに真理があるとすれば、どの様な真理があるでしょう。聖書は、私たちが、自らの関わる場所、共同体のなかにあつて、自らの信仰・思いをつらぬくことと、他者の思いを徹底的におしはかることの、二つの方向の事柄を示唆し、その上で矛盾相剋しかねないこの二つの道を、ふたつとも全うする

事を教えていると思えます。

「忖度」という言葉が世間ではやっています。本来の忖度は、他者の心を思いやることであり、世間でいう真実を曲げたり、他者への過剰な配慮から沈黙するようなことを意味してはいません。本来の忖度とは、あくまでも他者の思いを押し量り配慮することです。押し量りつつ、他者と共に生きるこの場所を、より善いものとしていく、そこにこそ、教えに適った気高い人の生き方があるのだという理想を示してくれていると、聖書の言葉を受け止めたいと思います。まさに大学が掲げる「神を仰ぎ 人に仕う」ことの深い意味です。

祈り

皆さん、祈りの姿勢をとってください。

大変過酷な3年間がすぎ、ふたたび平生の生活が戻ってきています。

皆さまの、これからの大学生活が豊かなものとなりますように。

私たちは、日々の生活の中で、他者との軋轢を避けることができません。

避けるのではなく、その只中で、深く他者を慮り、自分ができる範囲で、他者に手をかす。そのようにありたいものです。

どうか、神様、私を御意にかなう器となされ、御心にかなう生活を私たちがおくることができ、同時に他者との生を全うする道をあゆめるよう、知恵と御守りをお示し下さい。

2023年10月26日 聖学院大学 全学シリーズ礼拝「聖学院120周年を覚えて」